

Experimental Philosophyの紹介

文学部研究科・科学哲学科学史専
修・近岡利昌

Experimental Philosophyとは何か？

- 人々の哲学的直観の基礎となっている心理学的過程を実験によって明らかにしようという哲学の運動
- 心理学者の側からみると“*I like to think that experimental philosophy is really social psychology with a fresh set of questions to investigate...*”(D.Pizzaro 2008)

従来の(分析)哲学の手法

- ある概念について念入りに定義を行う (e.g.. ドーナツとは茶色で甘くて輪の形をしたお菓子だ。)
- 誰か他の哲学者が、その定義を満たしているが直観に逆らうような反例を作る (e.g.. ポッキーを輪の形にしたらそれはドーナツといえるのか?)
- 定義を見直す (e.g.. 小麦粉の生地を油で揚げたものという条件を追加) あるいは相手の議論の不備を突く
- 繰り返し

実験哲学の目的は？

- 従来のような概念の必要十分条件の分析が目的ではない。概念の応用に影響する要因の説明、そしてその基盤になっている心理的過程の実験的解明を目的にしている (Knobe & Nichols 2008)
- 直観の精密な記述ではなく、心理学的過程の説明の深さが重要 (Knobe & Nichols 2008)

実験哲学は人気投票ではない

- 仮にX%の被験者が、学説Aを好んだからといって学説Aの妥当性が証明されるのか？
No
- (例えば)ある直観的判断が信頼性のあるものかどうかを知るために、その直観を生み出す心理的過程についての実験をする
- しかし、実験と哲学的論証の関係に関しては研究計画ごとに大きな違いがある

研究事例の紹介

- 認識論と文化心理学
(Weinberg, Nichols & Stich 2001)
- 決定論と道徳的responsibility (Nichols & Knobe 2007)

Part I. Normativity and Epistemic Intuitions

(Weinberg, Nichols & Stich 2001)

認識論の論争

- Externalism vs Internalism
- Externalism 信頼性のある過程を経て得られた真なる信念ならばそれは知識である
- Internalism なぜその信念にたどり着いたのか根拠を述べられないとそれは知識ではない

従来の認識論の方法の批判

- 知識の定義や反例が哲学者の直観に合うかどうかの問題にされてきた
- 哲学者達とはかなり違う風に推論し、信念を形成する人々がいる可能性(Stich 1990)
- 直観と反省のみで進行する手法に問題は無いのか？

直観に差が生まれる可能性

- 4つの条件(文化・社会経済的・哲学の知識・問題の提示のされ方)ここではそのうち二つについて実験する
- 集団の文化差
- 集団の社会経済的違い
- Nisbettらの研究(2001) 文化間で思考スタイルの差異

実験計画 1.

- 物語を被験者に提示し、登場人物がある事を知っているのかそれともただ信じているだけなのか評価させる
- 被験者はRutgers大学の学生。インド亜大陸出身者と西洋出身者

物語1：陰謀論の話

- 喫煙はガンにかかる率を増大させる。しかしタバコを吸わずにニコチンを摂るだけではガンにかかる率が増えないという証拠が沢山ある。
- Jimはそれらの証拠と研究結果を信じている。しかしながら証拠はタバコ会社が人々を誤解させようとして捏造した可能性がある。
- しかしJimは捏造の可能性に気づいていない
- さて実際のところタバコ会社はそのような捏造はしていない。
- 彼はニコチンがガンにかかる率を増大させないことを知っているといえるのか？それともただ信じているだけか？

結果

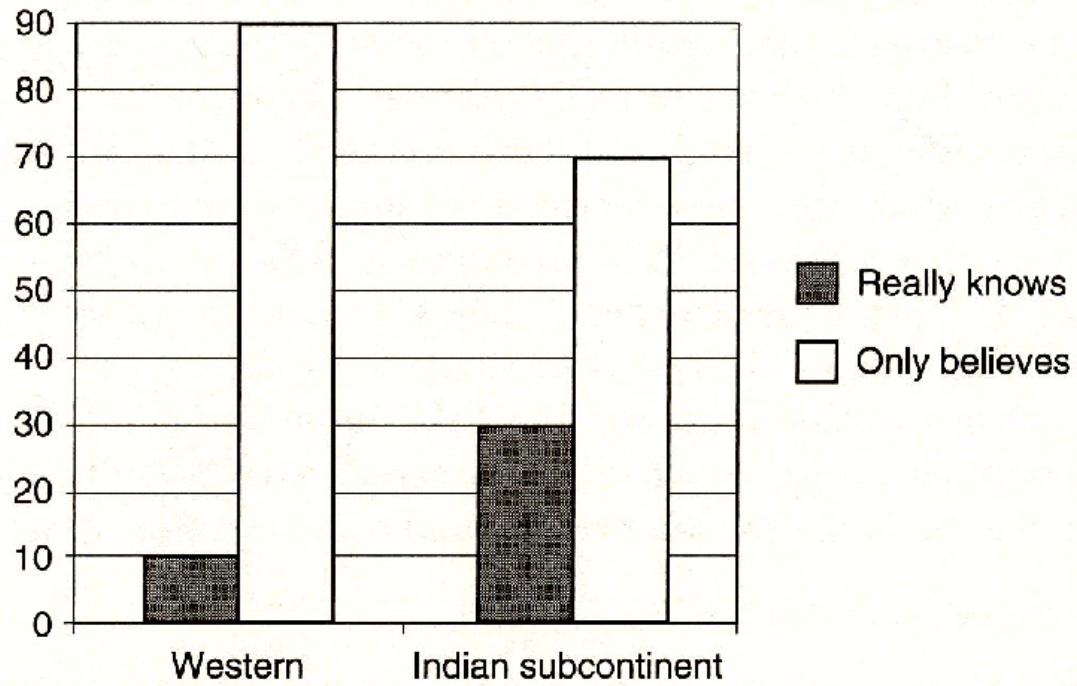


Figure 2.7. Conspiracy Case.

$p < 0.05$ $n = 89$

物語 2 : 動物園のシマウマ

- Mikeは息子を連れて動物園にきた。彼はシマウマの檻の前で「あれはシマウマだよ」といった。それは確かにシマウマだった。
- しかしその地域の年長の人々は動物園の経営者がロバに模様をつけてシマウマに見せかける可能性があることを知っていた。そしてMikeはそのことを知らないし、そうであっても見分けがつかない。
- Mikeはシマウマであることを知っているのか？ それともただ信じているだけか？

結果

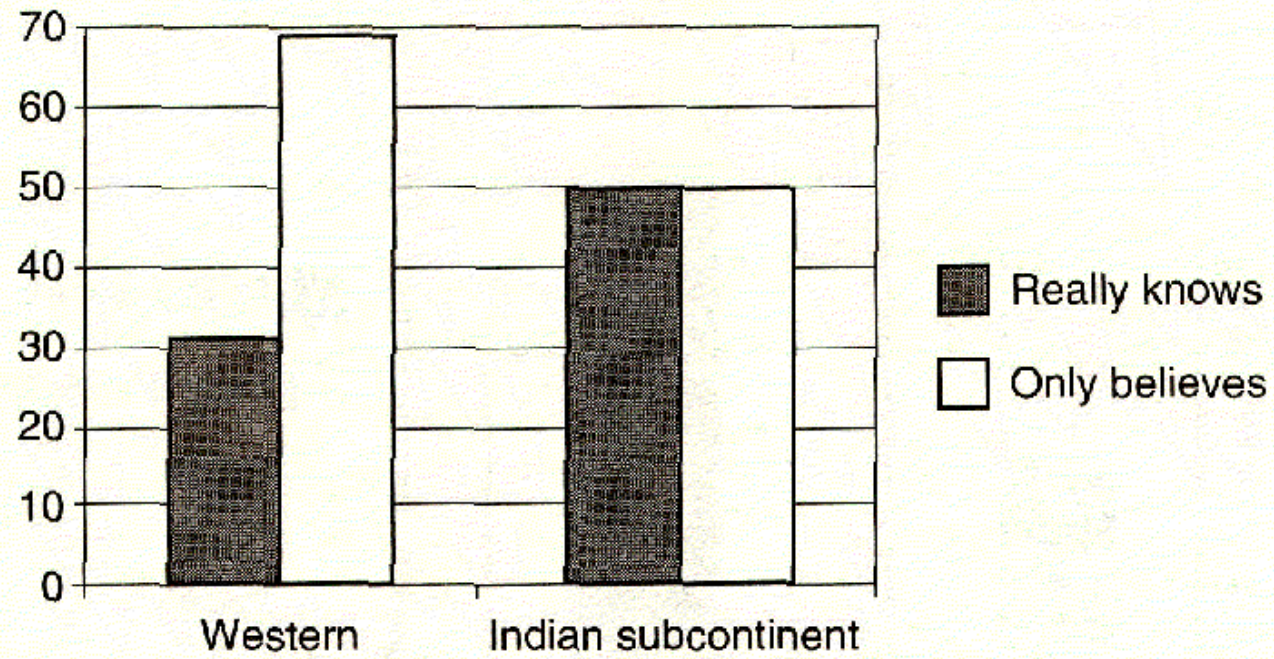


Figure 2.8. Zebra Case.

$P < 0.05$ $n = 86$

実験計画 2.

- 同様の物語を社会経済的地位(SES)の高い集団とそうでない集団に提示
- New Brunswick, New Jerseyの商業地で被験者を集めた。全員成人。
- 一年以上大学に籍を置いたことのある人を高SES、そうでない人を低SESと分類

結果：シマウマの物語

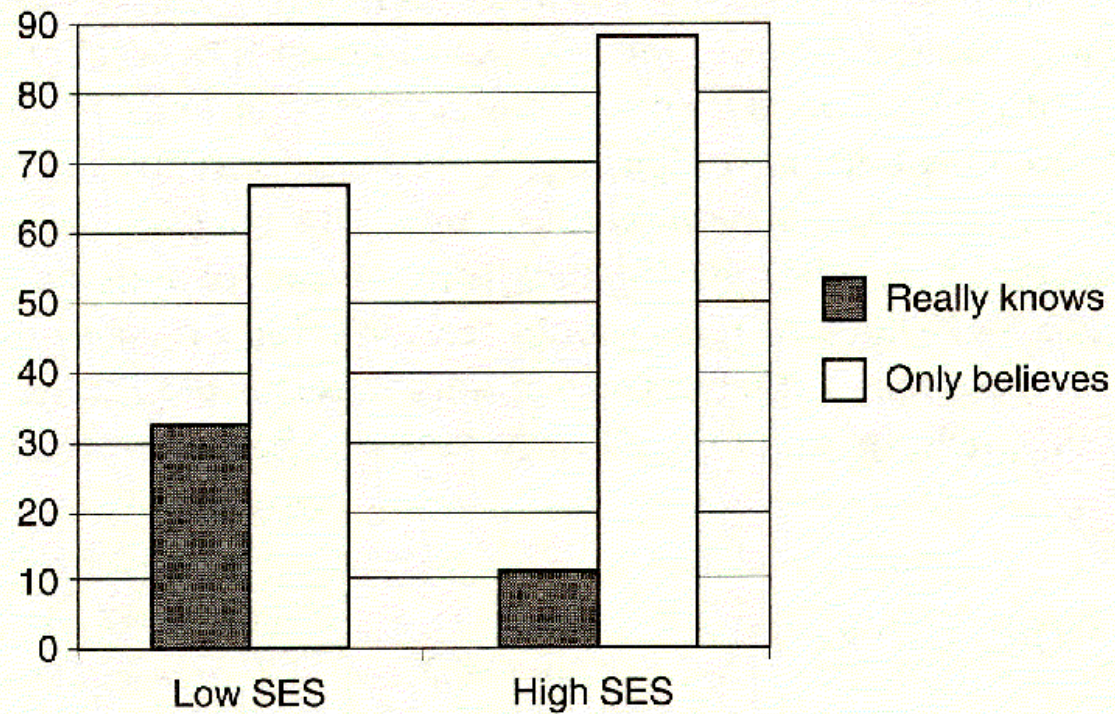
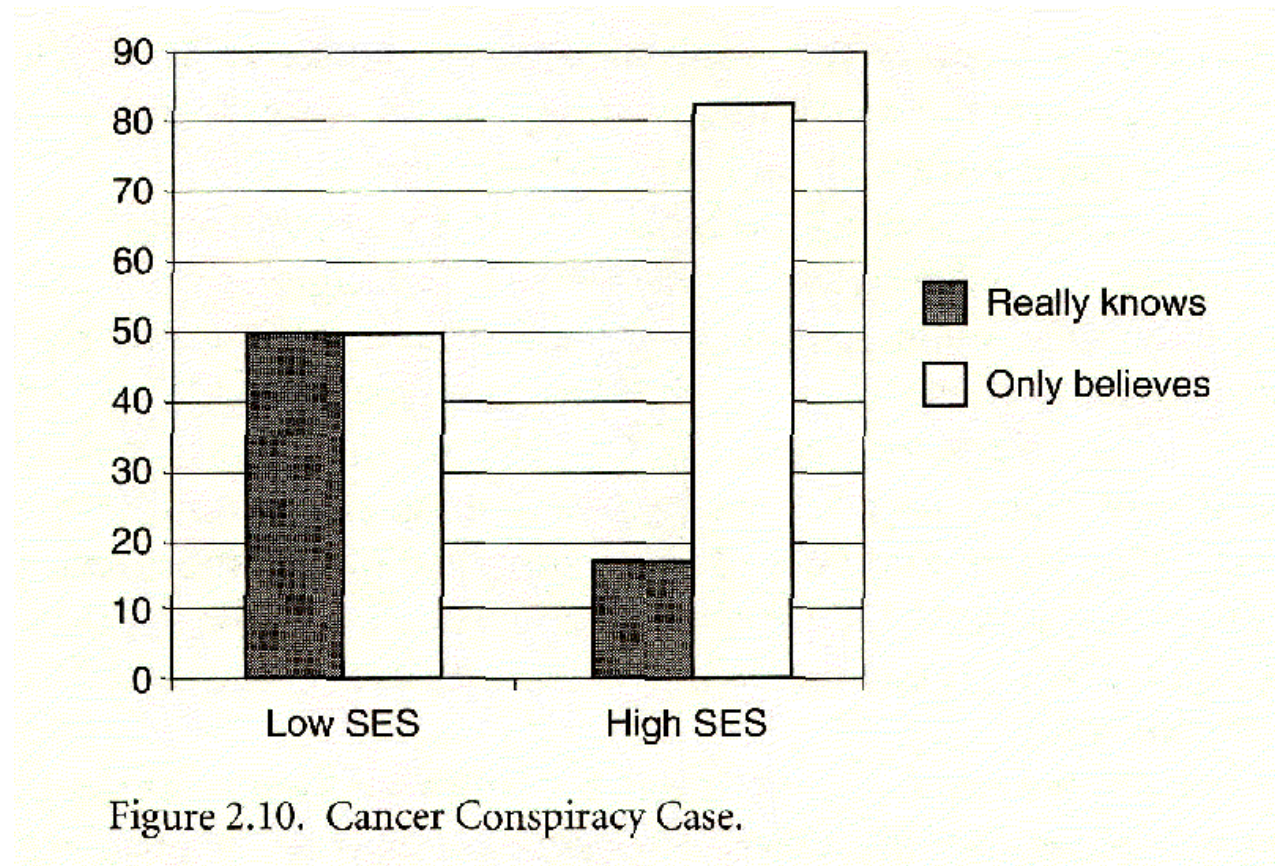


Figure 2.9. Zebra Case.

$p < 0.05$ $n = 58$

結果：ガンの陰謀論の物語



$p < 0.01$ $n = 50$

Weinbergらの考察

- 従来の認識論は哲学者のローカルな条件 (文化的、社会経済的) に依存した方法論に基づいていた？
- われらは結果の説明をする理論的枠組みを持ち合わせていない
- 反事実条件に対する敏感さ？ 低SES群は知識の基準が低い？さらなる研究が必要

Part II. Moral Responsibility and Determinism

(Nichols & Knobe 2007)

倫理学の論争

- Incompatibilism vs Compatibilism
- Incompatibilism もし決定論が正しいならば、人は道徳的にresponsibleではありえない。なぜならば人の行為は先行原因によって決定されているから
- Compatibilism もし決定論が正しくても、人の道徳的responsibilityは損なわれない

最近の論争の展開

- 最近の哲学の議論では(量子力学や形而上学などの論拠以外に)直観に訴えることが多い
- ある哲学者達は人々がIncompatibilistの直観を持つと主張(Kane 1999 Strawson 1986 Vargas2006)
- ある哲学者達は人々が実際Compatibilistの直観を持つことを示唆する実験を行い、この主張に挑戦(Nahmias et al.2005)

仮説：二つの心理過程

- 我々はある場合にはIncompatibilistであり、ある場合はCompatibilistである
- 質問の定式のされ方によって道徳的 responsibility に対する反応が大きく変わる
- 抽象的で理論的な質問の定式であると人々はIncompatibilistのように答える
- 感情を引き起こす質問の定式だと人々はCompatibilistのように答える

Compatibilismを支持する先行 研究 1.

- (Woolfolk, Doris, Darley 2006)「ある男が強力な服従薬を飲まされて命令に逆らえず犯罪を犯す。」
- 条件1.男は犯罪を犯したくない 条件2.男は犯罪に魅力を感じていたがためらいがあった。
- 被験者は条件1よりも条件2のほうで男に道徳的責任を認めた
- 行為の不可避性よりも、動機と行動の一致のほうが道徳の責任判断に影響

Compatibilismを支持する先行 研究 2.

- (Nahmias et al. 2005)「22世紀のス・パーコンピューターが100%の精度で、Jeremyが生まれる20年前に、彼が銀行強盗をすることを予言した。事実彼は45年後それを行った。Jeremyに道徳責任はあるか？」
- 83%の被験者が彼に道徳責任ありと判断。
- 少しずつ条件を変えた質問でも同様の結果

- 一般人は素朴なCompatibilistなのかもしれない
- ではなぜ哲学者の幾人かはIncompatibilismを執拗に擁護するのか
- 何か複雑な心理過程があるのか？

実験計画

- Utah大学の学生が被験者。質問紙に答えてもらう
- 「宇宙A、全ての事柄が決定論的な世界、人の意思も全て先行要因で決定されている。宇宙B、人の意思決定以外は全て決定論的な世界。あなたの宇宙はどちらに似ているか？」と質問した
- 被験者の90%が宇宙B(非決定論)と回答

続いて被験者を2つに分割

- 具体条件 「宇宙A(決定論的宇宙)で、Billは彼の秘書に惹かれ、彼女と結ばれるためには、妻と3人の子供を殺すしかないと判断した。彼は火事がおこると家から脱出不可能な事を確認すると、出張に出かける前、地下室に発火装置を仕掛けた。Billに妻と子供を殺した十分な道徳責任はあるか？」yes/no
- 抽象条件 「宇宙Aで人は自分の行為に十分に道徳的な責任を持つことができるだろうか？」yes/no

結果

- 具体条件のもとでは「十分に責任あり」と答えた者が72% Compatibilism
- 抽象条件のもとでは「十分な責任はない」と答えた者が86% Incompatibilism

考察

- なぜCompatibilist - Incompatibilist 論争が長期間にわたって続くのか
- 片方の直観を生み出す心理過程が、もう一方の直観を生み出す心理過程とことなるからであるように見える

結果の解釈

- 遂行の誤り説・・・具体条件のもとでBillに責任ありと答えた者の大多数は自分の道徳理論を具体的な問題に適用し損なっている。
- だから彼らはCompatibilistのように判断しても、そうではない。
- ある条件下で人は不合理に振る舞うということであり、これには多くの社会心理学研究の支持がある(e.g..Kahneman&Tversky 1981)

結果の解釈

- 感情能力説・・・遂行の誤り論者のいう抽象的な理論は現実生活で果たす役割が小さい。
- 我らは人の道徳判断において感情的直観のはたす大きな役割を認めなくてはならない
- #しかしながら、この解釈では人が具体条件「正しい」判断をしている主張はできない

結論

- 人はIncompatibilist Compatibilist両方の直観を持っている。
- この二つの直観は異なる心理学的過程によって生み出されたように見える。
- これらの問題について答えるためにはその心理学的過程についての正確な知識を持たねばならない

参考文献

- Knobe, J. & Nichols, S., ed. (2008).
Experimental Philosophy. New York:
Oxford University Press.

有用なWeb上の情報

- Experimental Philosophy Blog
<http://experimentalphilosophy.typepad.com/>
- Joshua Knobe Experimental Philosophy page
<http://www.unc.edu/%7Eknobe/ExperimentalPhilosophy.html>
- アリゾナ大学, 実験哲学研究室
<http://epl.web.arizona.edu/>